SFプロトタイピング小説

衣食住のあるところ

猿場つかさ

この小説はフィクションです。実在の人物・団体とは一切関係ありません。

１．
墓参りを終えると、伸之は四十年近く前に卒業した小学校に立ち寄った。十年前に〈町仕舞い〉を選択した白波町の町立第一小学校だ。校門の前の道路はひび割れや陥没が目立ち始めていた。思い出話をする者か、伸之の一族のように墓を移せなかった者しか訪れないのだから仕方ない。
都会に移そうと提案したのは自分だった。親族に強く反対されたのに、結局、墓の手入れをしているのは自分だけだ。伸之は自嘲気味に笑って、車に乗り込むと、都内の自宅へ帰るように命じた。墓の世話は面倒だが、自動運転のお陰で、移動にかかる二時間は趣味の動画を楽しめる。
とはいえ、近頃は車で移動していると、気が滅入ることがある。
フロントスクリーンに、沿道の自治体や事業者の出す移住者募集や移住サポートの広告が次々に表示されるからだ。嫌でも移住を意識させられる。伸之くらいの年齢はターゲティングされていた。衰退の進む自治体は断末魔のように、日に日に移住補助を手厚くする。人気の自治体の周辺では『50代独身者の移住必勝法』というコンサルタントが笑顔で広告に現れる。
自宅に戻ると、隣の部屋の夫婦が菓子折りを持ってやってきた。
「来週、栗駒市に移住することが決まりまして」
「急ですね。例の、〈ニューTOKYOビジョン〉を気にされてですか？」
都は都会文化の担い手である職業、ファッション関係者、広告関係者、建築家や学芸員などと、比較的若い世代を優遇する基本方針を発表した。強者の都でさえ、競争に参加せざるを得ない。
お隣さんとは、中高年は住みづらくなりますね、と話をしたばかりだった。
「私らは山が趣味ですから、老後は北アルプスを臨める松木市に移住したいんです。でもあそこ、山が趣味レベルだと移住が認められないんです。医療関係者だったらすぐ住めるそうだけど。今回はお隣の栗駒市にたまたま空きがでたので、山のガイドの経験を積んで、松木市への移住を狙おうかと。移住も逆算の時代ですな。趣味を活かすといいですよ」
そう言われて、伸之は話題をそらした。
食べ歩きとちょっとした料理は趣味だったが、それを活かして日銭を稼げるほど甘くないと思っていた。今のデータエンジニアの仕事はリモートで全国どこでもできるが、どこ、を具体的に探そうとすると、ピンとくる場所が見つからない。
翌週、自分でアウトドア向けに改造したバンで移住していくお隣さんを見送りながら、伸之は自分の行く末を考えねば、と頭を抱えた。

2.
伸之は都内H駅前の青葉町の直売フェアを訪れていた。
知らない町だったが、郊外に移住した元同僚から、食べ歩きが趣味なら、どう？　と紹介を受けたからだった。彼女は趣味のレースゲームを通じて運転技術を上げ、全国の自動運転車をリモートサポートしている。要サポート件数の多い青葉町でサポートを繰り返していたら、住民の推薦権のある準市民の称号を手に入れたのだという。
都心から車で二時間ほどの青葉町は有名ではないが、移住待ちの人は５０００人を越えており、推薦

がないと移住は難しいらしい。豊かな自然と公共モビリティとそれを支えるインフラの自由度の高さが売りのようだが、それだけなら、アクセスのいい自治体の一つにも見えた。人気の理由は行けば分かると言われ、伸之の期待は高まっていた。

「わさびの町青葉町」と書かれたのぼりが並ぶ中、カスタムされた大きなキッチンカーが何台も停まっている。車内の一部に敷かれた畳に客が座り、わさび料理を振る舞っていた。
伸之が席に座ると、スタッフがやってきて、重雄と名乗った。調理を担当する85歳なのだという。わさび丼と酢の物を食べると、美味しかった。酒を呷り、伸之が饒舌に語ると、重雄はいい感想だと笑い、青葉町で採れる色々なわさびを持ってきて、水、土、気温など条件と味の関係を話した。
食べるたびに感想めいた何かを口にしながら、うまい、うまいと言っているうちに酩酊し、伸之はいつの間にか眠りこけていた。
日差しを感じて、目を覚ました。誰の姿も見当たらない。外を見ると広い川が流れていた。川に沿う道に、多くのモビリティが集まっているのが見えた。
「重雄さん、いますか？　ここはいったいどこなんでしょう」
「ここは毛無川沿いの共有スペース、青葉町ケナシポータルです。移住者課の山木です。一旦、降りて、推薦状を見せてください。」
降車すると、緑のバンの前に女性が立っていた。表情はひどく硬かった。伸之に渡されたスマホの推薦状を入念に確認した。
「OKです。時間がかかりすみません。推薦を受けると二週間の滞在枠が確保されるのですが、最近、うちのEV給電設備とかのインフラ目当ての人が多いんです。今日はこのコミュニティバンで青葉町を案内します」
バンの扉が開く。笑顔の重雄が座っていた。乗り込んだ伸之は居住性の高さに驚いた。風呂があれば、一ヶ月ぐらい住めるとさえ思った。
山木は電話を取ると、急に呼ばれてしまったと言って、去っていった。
走り出したバンの中で、重雄が口を開いた。
「近頃は町役場も人手不足でね。山木さんは忙しそう。この子が電気飲みたいみたいだから、ちと待ってね」
バンが給電スポットに停まる。ポータルには大量の給電スポットが備えられ、大小さまざまなモビリティが停車して、マルシェや、織物や料理の教室が活発に営まれている。
わさび畑の中の道を、バンはゆっくりと進んでいく。スクリーンに表示された様々な数字が刻一刻と変化していた。
「このバンが土や水を調べて、数値化して回ってる。おれたち高齢者は散歩代わりに町を回って、あっちの畑は最近新しい害虫が出た、とか去年とどうも実りが違う、とか話をして、青葉町の日記をつけてくんだ。全部記録されて、役場がそれをまとめてくれる」
ここは前はハーブ畑で失敗して、その前は荒れた田んぼだった、など、頭の中に青葉町の全てが入っているかのように、町中で、重雄は止むことなく話し続ける。

「環境のことも昔のことも詳しいですね。重雄さんは青葉町でお生まれに？」
「おれは都会生まれ、カミさんが体壊してこっちに来た。ここには町を回るだけで楽しい、役に立てるって人が前から多かった。ほら、あんな感じだ」
コミュニティビークルがいくつも停まっている。高齢者だけが乗るものも、大学生が同乗するものなど様々だった。降りてきて土や水の匂いを嗅いで話す者もいたし、耕耘ビークルや肥料や微生物について活き活きと議論する声も聞こえた。
「おれはともかく、カミさんにも何かしらの生きがいがある場所で生きたかったんだ」
ポータルへ戻ると、山木が青葉町町役場と書かれたモビリティへ伸之を招き入れた。
病院から迎えに来た一人乗りモビリティに乗って去る重雄を見送ると、山木が口を開いた。
「重雄さんって、あなたみたいな人を誘ってくる謎の料理人、みたいになってますけど、元は土木技術者なんですよ。防災と、農業用水の整備を担っていました。今じゃ私より町に詳しくて、死んだ後も青葉町に貢献したいなんて言ってます」
車内の巨大なディスプレイを指さしながら、山木は続ける。
「環境データや住民の記憶が、日々この青葉町データポータルに集約されて視覚化されます。誰でも閲覧できて、誰でもデータを追加できるんです。町の手触りがあると言われます。人の動きが、住民の、そして町の資産になっていくんです。うちの問題は、みんな移動が好きすぎて、モビリティを住居に改造している人が多いし、整備が間に合ってないんです。今ちょうど、役場の計画ミスで隣町に整備士グループが貸出中でして、故障対応と整備をどうするか協議中です」
伸之はお隣さんを思い出した。バンの改造が得意そうだったから、助けてくれるのではないか。連絡すると、自身は行けないが、彼の仲間がしばらく整備を手伝ってもいいと申し出てくれた。
話が済むと、伸之は高台の〈わさびの湯〉に案内された。汗を流した後、帰宅するのも、居続けるのも自由らしい。生活用品は見繕ってくれるのだという。
いいところだ。湯に浸かりながら、移住するのもよさそうだと考えていると、伸之は隣の若者に話しかけられた。
「移住者課の山木さんと話してましたね。僕は元部下でした。今日は引っ越しの後処理をしに来てて、移住をご希望ですか？」
「そうですね。マッチするか分かりませんけれど」
湯で気持ちが緩み、伸之が自分の身の上話をすると、若者も返してくれた。
「頑張ってやってますけど、結構危ういですよ。全国的に足りない整備士も隣の市に競り負けてるし、山木さんは、金じゃない報酬でやっていけるって息巻いてるけど。モビリティ居住者率も高いから、防災計画が不安だし。僕は都会に出ることにしました」
「最近はこういう町の方が、若い子の裁量が大きいって聞くけど」
「それはそうですね。でも、町役場でキャリアを積むと、心情的に町と一心同体になるから、どんどん他に移住できなくなるみたいです。それなら、自由なうちに辞めようかなって」
若者は移住の裏話を続けた。伸之のようなデータエンジニアだと、マッチはするが、恐らく課題解決型になるため、最初は期間指定の限定移住しか認められないかもしれないという。

できれば移住は一度にしたいが、そうもいかないのか。
伸之は暗い気持ちになり、興を削がれた。その日は自宅に戻ることを決めた。

3.
二週間が経った。お土産に買ったわさび漬けも尽き、伸之が移住のことなんてすっかり忘れたころ、山木からメッセージを受け取った。伸之はよく覚えていないのだが、酩酊した時に語ったわさび料理のレポートが録音されていて、売り文句として評判だから、別の料理も食べてほしいというものだった。
せっかく忘れかけていたのに、伸之は渋ったが、結局は熱意に負けた。
朝方、伸之は青葉町ポータルに到着した。その日は子どもたちの数が多かった。地元の子供達と都会から来た色白の子どもたちが対抗意識を燃やし合っている気配がした。
山木が隣の女性からマイクを受け取り、子供たちへ話し始めた。
「みなさんに害虫予測シミュレーションをお渡ししてます。恵梨香先生が説明してくれたのを繰り返しますが、採りすぎは却って環境を破壊するので減点になります。では、駆除コンペ、がんばってください」
伸之に気づいた山木が、女性と一緒に歩み寄ってくる。
「伸之さんのお知り合いのお陰で、害虫駆除コンペ用車両の整備が間に合いました」
「外からも沢山子どもたちが来るんですね」
「彼らが町に興味を持ってくれるのを期待してます。で、紹介すると、こちらが恵梨香さん。うち出身の生態系研究者です」
「わたしは土壌が専門です。伸之さんの料理のレポート、面白かったですよ。土の匂いとか味に言及する人、全然いないんですよ。青葉町は先端企業と連携して、モビリティで環境センシングしてますけれど、味の表現は人間の感覚に頼らないといけないんです」
「酔っ払っていたから、何を言ったか全然覚えてないんです。でも、昔から、その土地の食べ物を食べた時、水や土の話は日記に書くようにしていたんです」
伸之が答えると、山木は笑顔になった。
「うちの町はそういう感覚値とかどんな感覚的行動も価値になるんです。伸之さんは推薦状もあるし、味のレポートで貢献してくれるなら、期限付き許可じゃなくても申請が通せると思います」
伸之が顔をほころばせると、恵梨香がとんでもないことを言った。
「重雄さんから、今日は伸之さんが土を食べて感想を言ってくれるって聞きました。いまから、いけますか？」
「恵梨香さん、どこかで変な伝言ゲームになってると思うよ」
山木はそう言って笑った。
結局、いきなり土を食べさせられることはなかった。移住者登録を済ませ、審査の説明を受けていると日が落ちて、キッチンカーでの夕食に招かれた。重雄が駆除コンペの子供たちに食事を振る舞っている。恵梨香は隅のテーブルで、短期滞在者のイタリア人シェフのアルマとわさびの特性について話をしていた。伸之が審査担当者と一緒に隣に座ると、恵梨香が寂しそうな顔をした。
「アルマさん、明後日には出ちゃうんですよ。今日彼女のパスタを食べられるのはラッキーです」
アルマが厨房に立つと、山木が口を開く。

「うちにお店構えてもらいたかったけれど、彼女くらいスキルがあると、留めておけないです。今は移動レストランが主流ですし。補助でお金を出すのはサステイナブルじゃない。イタリアからのお客さん向けの宣伝塔になってくれたらと思ってます」
同席する審査担当が、口を開いた。
「山木さん、伸之さんの前に決まりそうだった人、どうしたんですか？」
「ほかを当たってって連絡しておいた。別の町と迷っているって言ってたんだけど、うちに決めかけてたから、クレームになっちゃった」
食レポに強い同世代の男性が、同じ役割で決まりかけていたのだという。

最終的に伸之が青葉町に住みはじめて三年が経った。はじめに訪れてから五年が経っていた。味と土壌の関係を言語化する役割の小さな事業が立ち上がっていた。そこでは、伸之の移住の代わりに弾き出されそうだった男性も働いていた。
わさび畑の道を、住民のモビリティと公共モビリティが整然と走っている。町のあちこちから発進し、隣町のはずれまで行って戻ってきたところだった。
青葉町ポータルで、山木が伸之と一緒に毛無川氾濫時の避難訓練の終了を宣言する。
「去年の大雨でも避難がうまくいったし、これで引き継ぎも終わりですね」
それは、伸之の防災計画立案のデータエンジニアとしての任期の終わりを意味していた。結局、伸之は、誰か弾き出すのではない移住の仕方を選んだのだった。
「そうですね。これで、味の方に専念できます」
「食べてもらいたい土、たくさん用意してますから。楽しみにしてますよ」
恵梨香がそう言うと、伸之は笑って、土の食べ方も研究するか、と笑った。避難訓練の打ち上げでは、定期的に料理を教えに来るアルマが腕をふるっている。イタリアからの旅行者の質問に、二年前にこの世を去り、対話AI〈重雄〉となった重雄の声が今日も応じている。